

氏名	呂建輝
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 5386 号
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)
学位論文題目	漢語の連濁と意味用法の史的変遷に関する研究
学位論文審査委員	教授 江口 泰生 准教授 京 健治 教授 宮崎 和人 教授 田仲 洋己

学位論文内容の要旨

呂建輝の『漢語の連濁と意味用法の史的変遷に関する研究』(A4 版 横 37 文字×33 行×194 ページ)は既発表論文 3 本(査読 2 本、国際学会 1 本)と口頭発表 1 本を元とし、新たに書き下ろしを加えて、序論、本論、結論の三部構成、本論は 4 章から構成されている。

序論の先行研究の部分は「漢語連濁の通時的的研究について」『日本語教育・日本学研究——大学日本語教育研究国際研討【確認】会論文集』(2016 年 4 月公刊予定)を下敷きにしている。

本論第一章は 2014 年 3 月「漢語連濁の史的変遷—後部要素が「産」の漢語について—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37 によっている。

本論第二章が 2015 年 11 月「漢語連濁の通時的考察と接尾辞化—「～勢」の場合—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』40 によっている。

本論第三章は 2014 年 10 月 19 日「漢語連濁の史的変遷と意味用法の一側面について」(日本語学会 2014 年度秋季大会)によっている。ちなみにこの口頭発表は日本語研究の最高峰である日本語学会の、2014 年度秋季大会発表賞を受賞した。

本論文の章立ては以下のとおりである。

序論

本論

第 1 章 「～産」の連濁の史的変遷

第2章 「～勢」の連濁の史的変遷

第3章 「～本」の連濁の史的変遷

第4章 接尾辞「～サン_産」「～ゼイ_勢」「～ボン_本」について

結論

参考文献

次に本論文の内容である。本論文の対象は漢語の連濁の分析である。文庫本はブンコボン（連濁）であるが、古本はフルホン（非連濁）である。安産はアンザン（連濁）であるが、長野産はナガノサン（非連濁）である。このように漢語には同じ漢字なのに、連濁形と非連濁形があるが、本論文はこれがなぜなのかという問題点に取り組んだものである。

本論文はこの問題点について、漢語の接尾辞化という観点から非常に合理的な解釈・説明を与え、連濁研究に新しい観点をもたらしたものと考えられる。「～ボン」や「～サン」という接尾辞があるとするのである。そして、その成立過程を「～産」「～勢」「～本」という具体例を用いて詳細に描き出した点も独創的である。古代的な連濁、すなわち鼻音の連濁で濁音形であった漢字形態素が、次第に切り出されて接尾辞として機能していく様相を細かく観察し、立証したものである。

まず序論で従来の研究動向についておさえる。漢語の連濁には鼻音、アクセント、モーラ数の条件などが指摘されてきた。主に共時的に条件を探る方法が多かったが、例外も多い。そこで本論文では共時的な分析だけでなく、史的変遷といった通時的な観点から分析をおこなった。

その資料として、二百以上の古典文学作品や古辞書などの写真版・影印版にあたり、古い資料を精査して、連濁形を丹念に収集し、用例としていった。「～産」「～勢」「～本」を対象に、各時代の連濁状況を明らかにし、現代にいたるまでの連濁の変遷を明らかにした。

第1章は「～産」の連濁の史的変遷についての考察である。「～産」は最初に二字漢語の後部要素に使われ、鼻音の前接によって連濁していた（難産・安産など）。

江戸中期になり「～産」に和語の前接ができるようになり、この場合の「～産」は和語化が進み連濁した（うい産・のち産など）。

この時期までに出来た「～産」の語彙は、連濁語は意味上「出産」を表すものに集中し（難産・うい産など）、非連濁語は「出産」を表さないものに集中している傾向があった（土産・財産など）。この意味の影響により、江戸後期以降、鼻音前接のない二字漢語にも「出産」の意味を持つものが濁音形で出現するという現象も生じた（逆産・早産など）。

一方で江戸後期に「出産」の意味を表さない語彙のグループには、「産地」を表す清音形の「～産」があった（倭産・国産など）。この「産地」を表す用法は江戸末・明治期より、自立語を受けようになり、前接語彙が拡大し（日本産・外国産など）、接尾辞へと移行していった。

以上のような史的変遷を経て、現代では接尾辞「～サン」があり、地名などに付いて産地を表示

することに使用されるとした。

第2章は「～勢」の連濁の史の変遷についての考察である。「～勢」は他の漢語と同様に当初、鼻音によって連濁していた（軍勢・番勢など）。平安末・鎌倉初期より和語が前接して、連濁するようになった（みせ勢・すけ勢など）。これにより、「勢」はどのような兵隊かを表すようになり、濁音形「～ゼイ」が接尾辞へと移行していった。現代語で「勢」は濁音形で、競技グループを表す接尾辞となったと結論した。

第3章は「～本」の連濁の史の変遷についての考察である。「～本」は古く「手本」の意味であった。当初、鼻音によって連濁していた（張本・根本など）。平安中期より和語前接の「～本」が出現した（て本・すり本など）が、連濁することはなかった。この理由は「本」が「手本」の意味を残存させていて、立派なもの・正式なものという意味をもっており、漢語らしさを保持していたからだと推定している。室町時代に入り、「本」は「手本」の意味から「書籍」の意味に変わった。「本」は日常語化し、和語が前接すると連濁するようになった（まき本）。こうして、「書籍」の意味で「～本」は接尾辞としての用法を獲得していき、濁音形で接尾辞へと移行した。

第4章は「産」「勢」「本」がどのような接尾辞なのか、という点について、語形の固定、アクセントの偏り、意味、造語性について論じた。また接尾辞の用法が出現するとき、どのような用法から出現したかによって、清音形（産）になったり、濁音形（勢、本）になったりするとした。

結論では以上をまとめるとともに、今後、接尾辞としての位置づけ、意味の検討、他の漢語接尾辞の語彙リスト、和語の接尾辞との関係など、さらに展開すべき課題を述べた。最後に参考文献を付している。

学位論文審査結果の要旨

学位論文の審査会は2月19日（金）18時から2-4セミナー室で開催した。主査江口泰生、日本語文法史の京健治准教授、現代日本語文法の宮崎和人教授、日本文学の田仲洋己教授の四人で審査にあたった。

最初に本論文と既発表論文の関係を申請者から説明してもらい、学位審査の要件を満たしていることを確認した。次に論文の概要、予備論文からの加筆修正箇所について、申請者から説明してもらった。あわせて日本語のレベルが超級であることも確認した。

次に各委員から質疑応答の形式で、本論文の審査が行われた。その結果を以下に示す。

本論文は非常に優れた論文である。第一にその結論が極めて説得的であるからである。漢語の連濁と称されてきた語彙のなかに、当初は鼻音による連濁であったものが、和語に接続し、さらにそれらの中から限定された意味を有し、漢語や和語などに自由に接続する用法が切り出され、接尾辞としての用法を獲得したものがある、という結論はもはや疑いようがないものと思われる。従来、たとえば「フルホン（古本）」は非連濁、「ブンコボン（文庫本）」は連濁形なのはなぜかという問題をモーラ数や前接部分との修飾関係で説明しようとしてきたが、例外が

多く、無理があった。しかし、本論文は「ボン」という濁音形の接尾辞を認めることによって、「文庫本」「歴史本」「ネコ本」「狂言本」など、多くの語彙の「～ボン」の説明に成功している。同様に「産」「勢」といった接尾辞にもこの説明が成り立つことが示された。

第二に上記と関連して、そのような接尾辞がどのようにして生じたか、という歴史的な過程も論証しており、これも十分に説得的である。鼻音の連濁、和語化による連濁などとも一連の流れのなかで相互に関連づけられており、本論文に示される歴史を辿ったことは、おそらく間違いのないところである。この学説は今後、学界でも連濁に関する重要な説として考察の対象になっていくものと期待される。

第三にその歴史的な展開の論証にあたっては、きわめて実証的な態度で貫かれているという点である。ある語形が清音だったか、濁音だったかという証明は、日本語の濁点がかもともと補助符号であったという歴史もあって、証明しにくいのである。しかし、本論文は二百以上の古典文学作品の複製、古辞書の写真版・影印版などにあたり、多くの用例に目をとおして、濁点のあるものを徹底的に収集し、その論証に成功している。

第四に申請者は日本語の超絶レベルであり、文章の正確さ、論述の丁寧さも高く評価された。本論第三章の元となった口頭発表は日本語学会の学会発表賞を受けたが、その際も発表内容とともに質疑応答の丁寧さも高く評価されている。この論文も丁寧に論述が進められており、こうした点もこの論文の特筆すべき点であろうと思う。

一方、問題点も指摘された。

接尾辞といっても内容はさまざまであり、全体のなかでどのように位置づけるのか、あるいは接尾辞をどのように考えているのか、という点は議論が十分に深められていない。第四章において「的」「化」「中」と比較しているが、本論文で対象としている名詞型接尾辞とは性質の異なったものであり、比較があまり有効性を発揮していないと思われる。

申請者は留学生であるにも関わらず、日本の古典文学作品を対象とするなど、極めてよく努力しているが、それでも資料として慶長古活字版『太平記』を用いたほうが良かった点など、妥当でないものも少々見られる。

また、直接、論旨には関わらないが、日本の出版物にある「複製」という呼び方を原本のコピーという意味にとらず、原本の模造という意味にとっている点などは日本語と中国語での意味の相違があるにしても、問題である。全体からみれば極小の瑕疵であるが、付け加えておく。

このような問題点もないわけではないが、従来の連濁研究に一石を投ずるものとなっており、その主張はオリジナリティに溢れている。論証にあたっては実証的な態度に貫かれている。極めて質の高い論文である。

以上から審査会は全員一致で博士（文学）の学位に相応しい論文であると結論した。